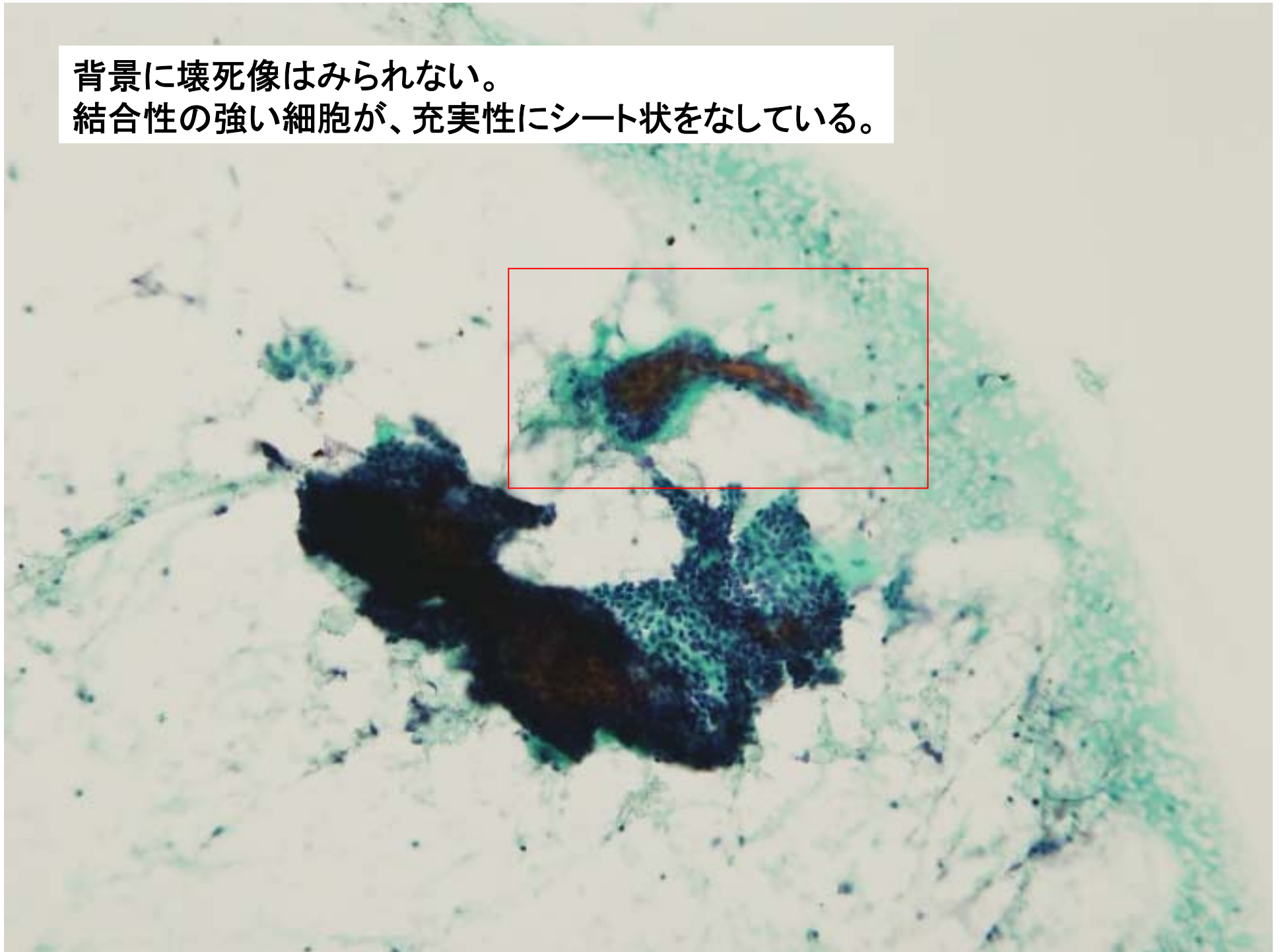


第47回 日本臨床細胞学会秋期大会スライドセミナー

症例および臨床経過：

66歳、女性、9か月前にヒダリ耳下腺の腫瘤に気づく。
増大傾向あり、圧痛を認める。顔面神経麻痺はみられない。
FNABにて悪性腫瘍の疑いがあったため、耳下腺腫瘍摘
出が行われた。

背景に壊死像はみられない。
結合性の強い細胞が、充実性にシート状をなしている。



集塊の細胞は上皮様形態を示す

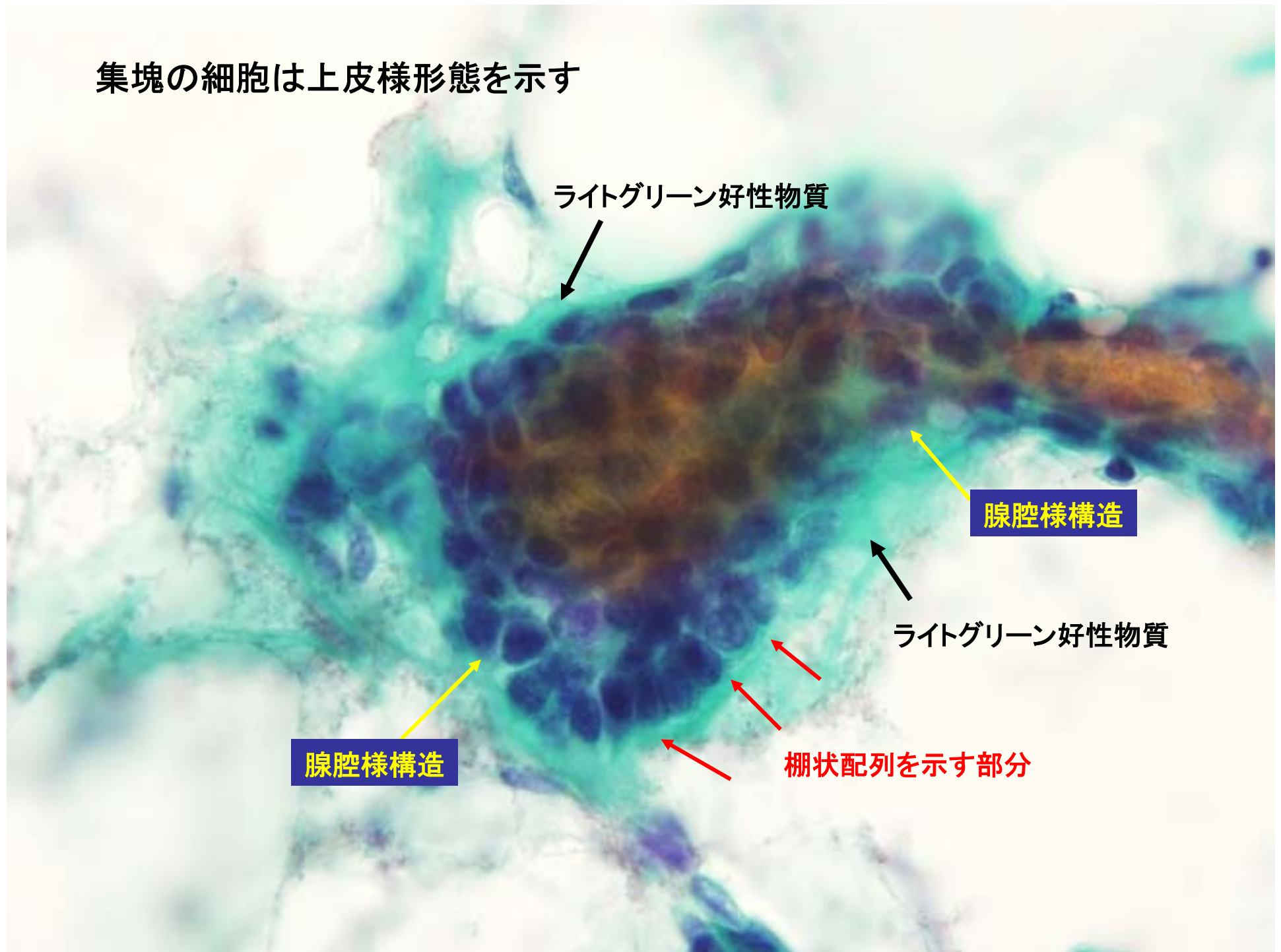
ライトグリーン好性物質

腺腔様構造

ライトグリーン好性物質

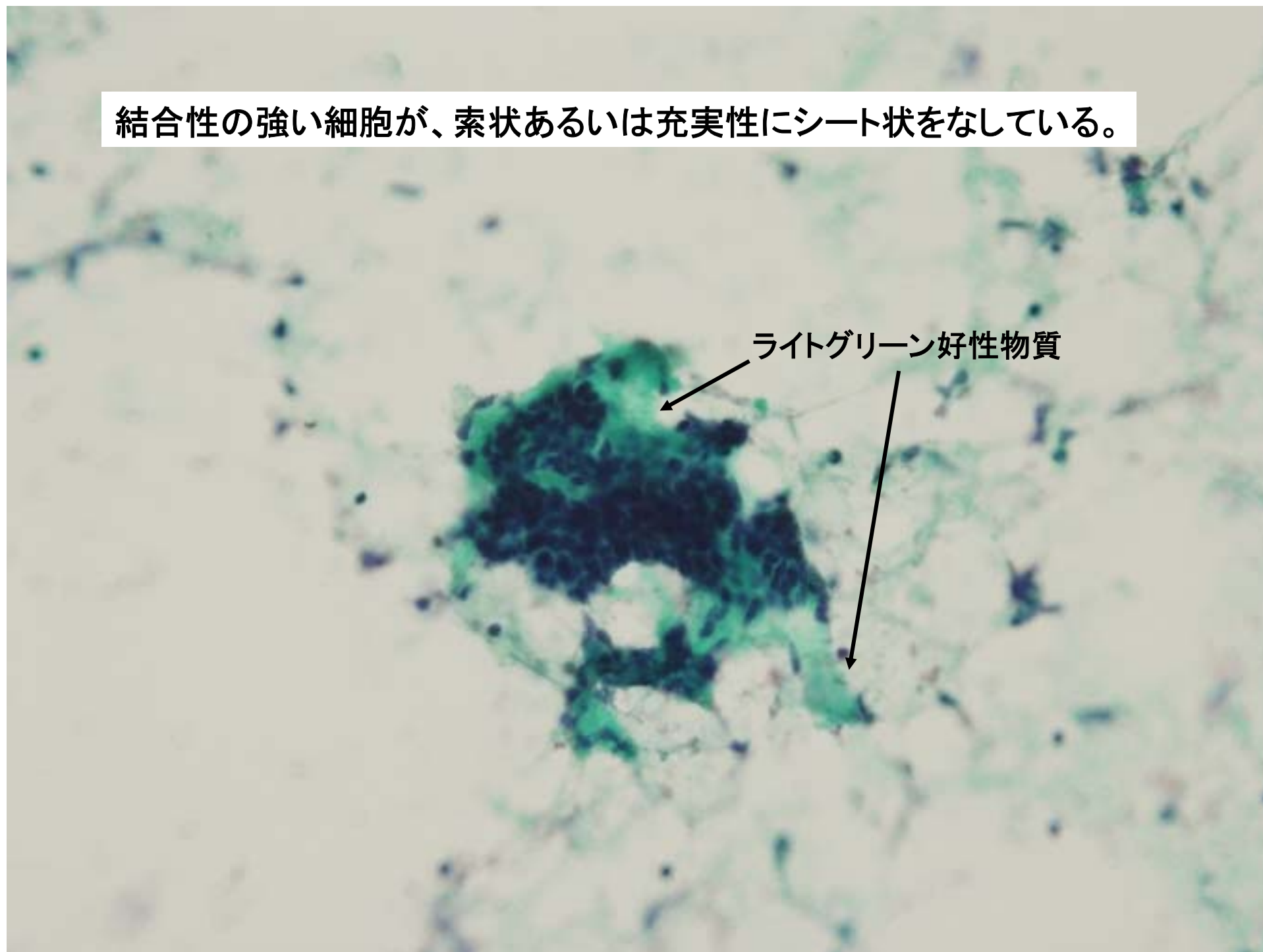
腺腔様構造

柵状配列を示す部分



結合性の強い細胞が、索状あるいは充実性にシート状をなしている。

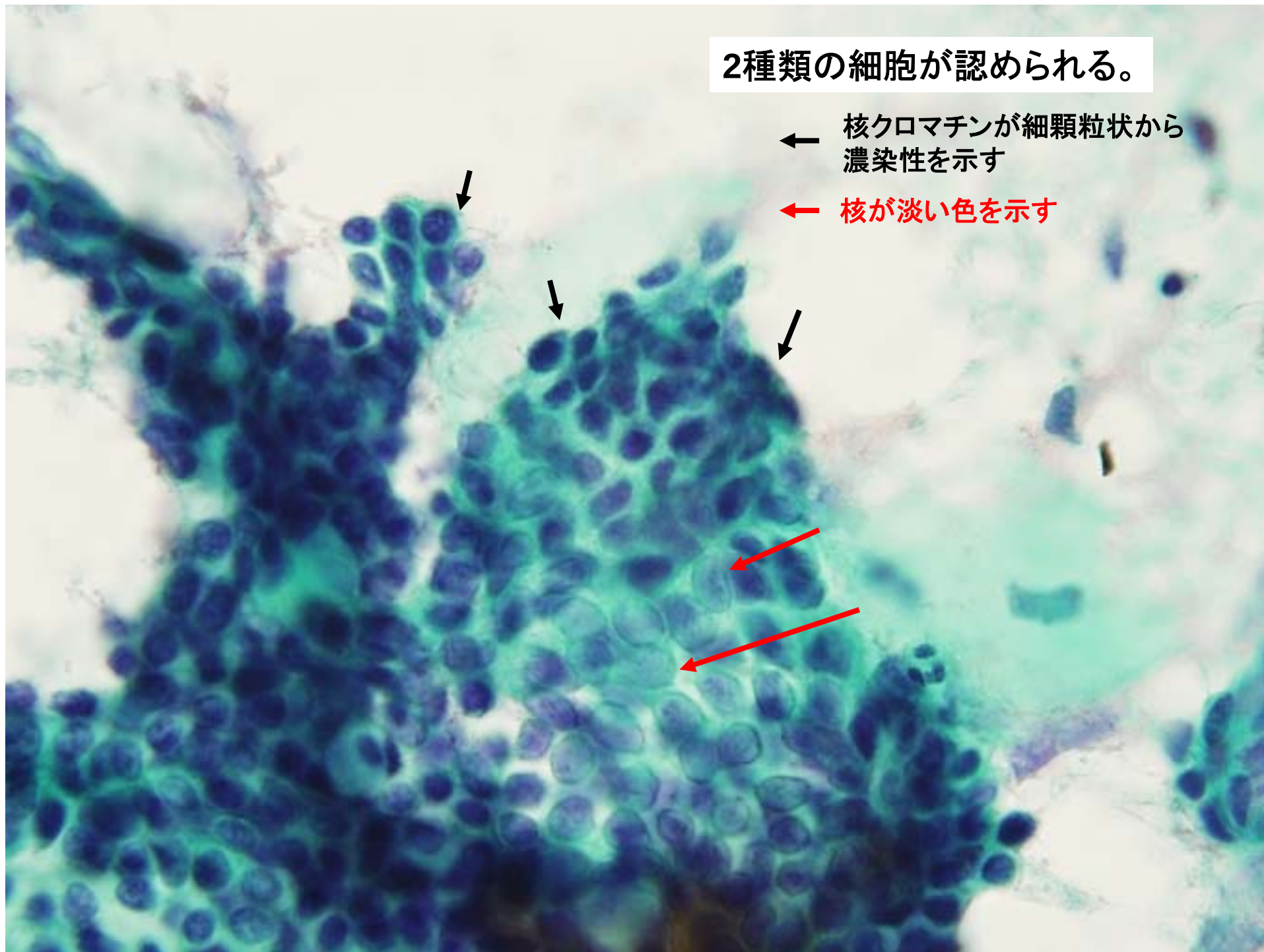
ライトグリーン好性物質

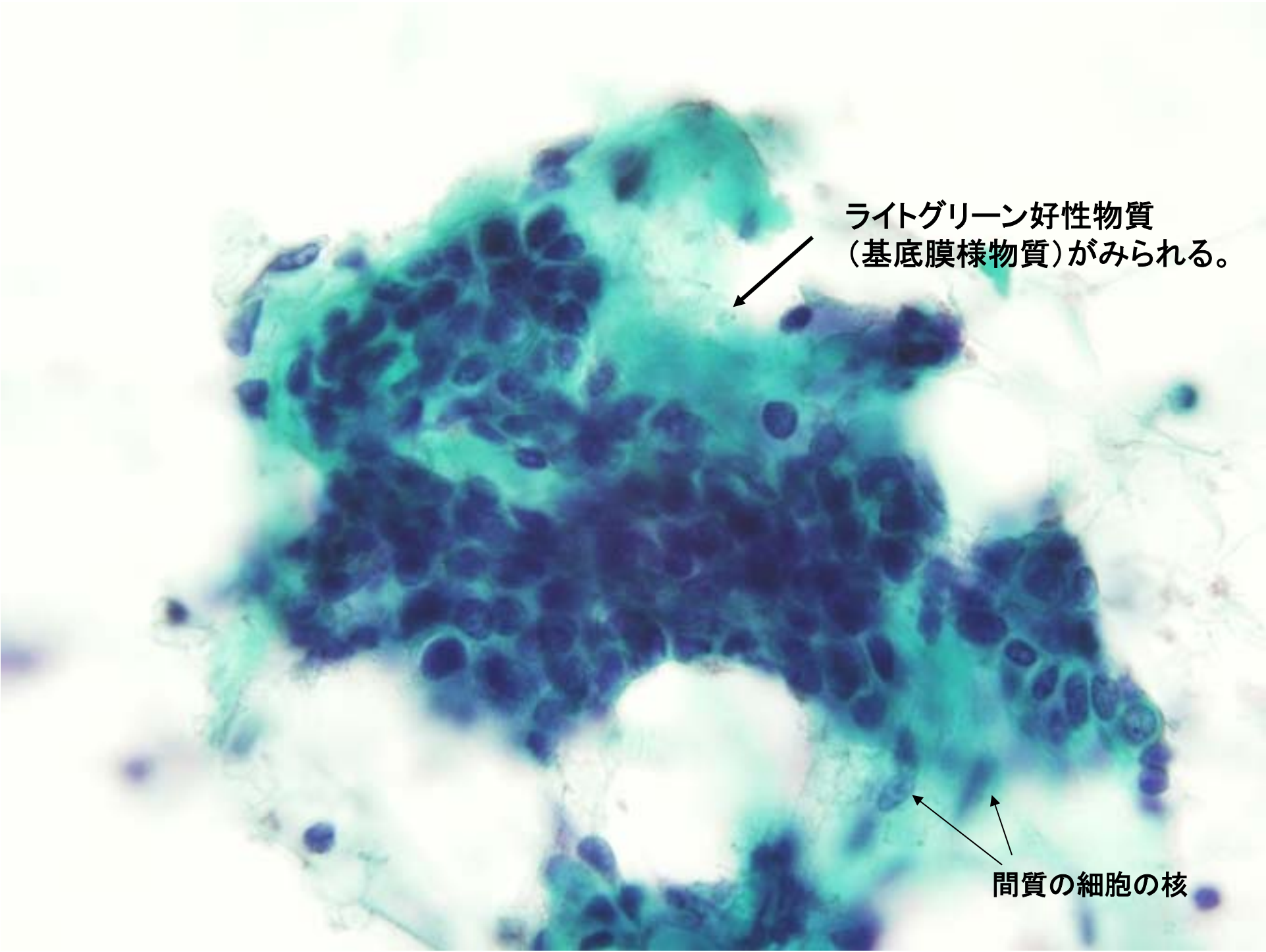


2種類の細胞が認められる。

← 核クロマチンが細顆粒状から濃染性を示す

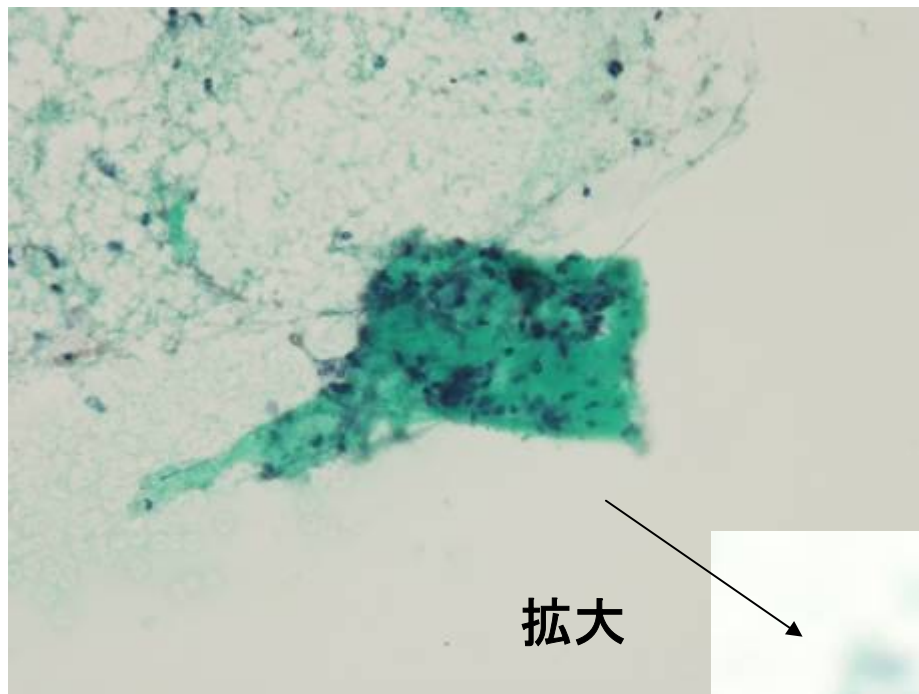
← 核が淡い色を示す





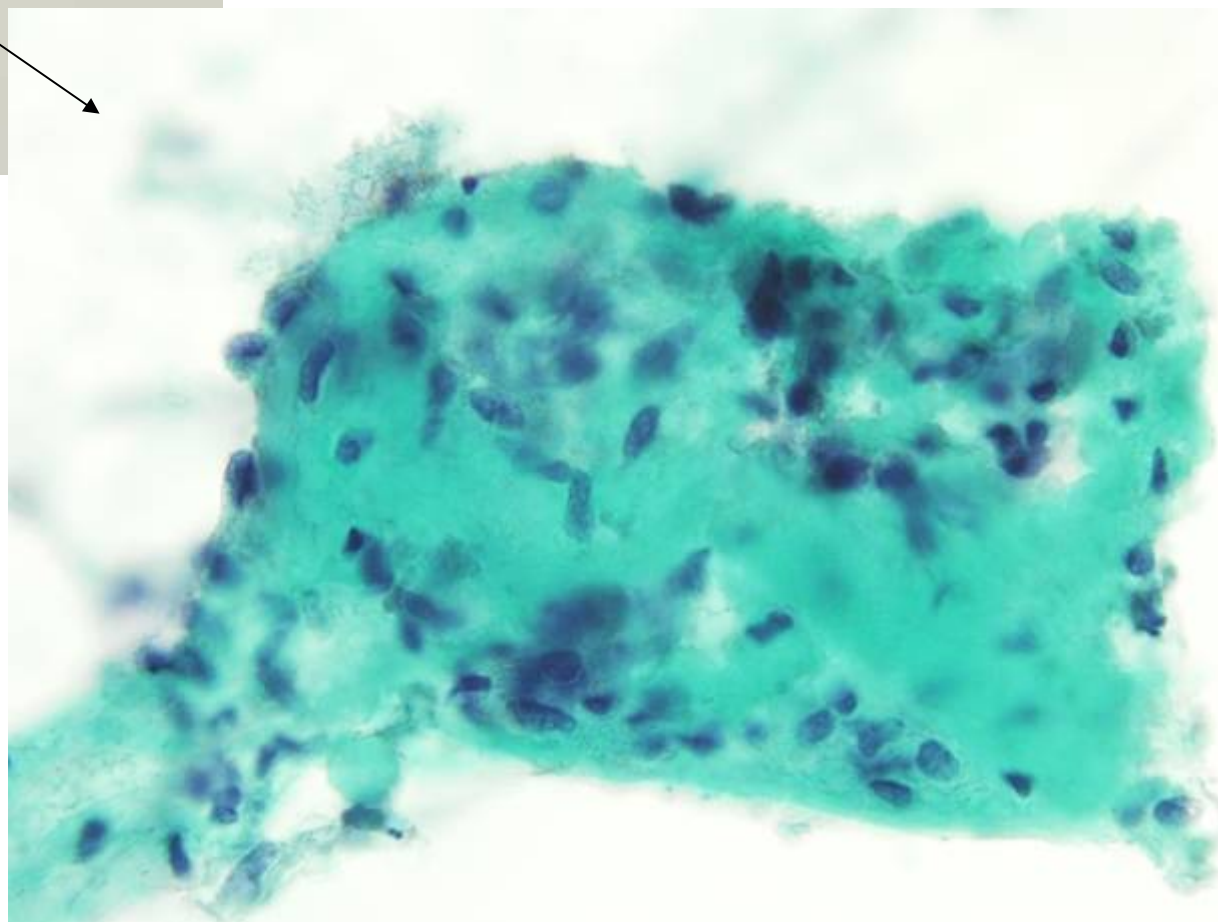
ライトグリーン好性物質
(基底膜様物質)がみられる。

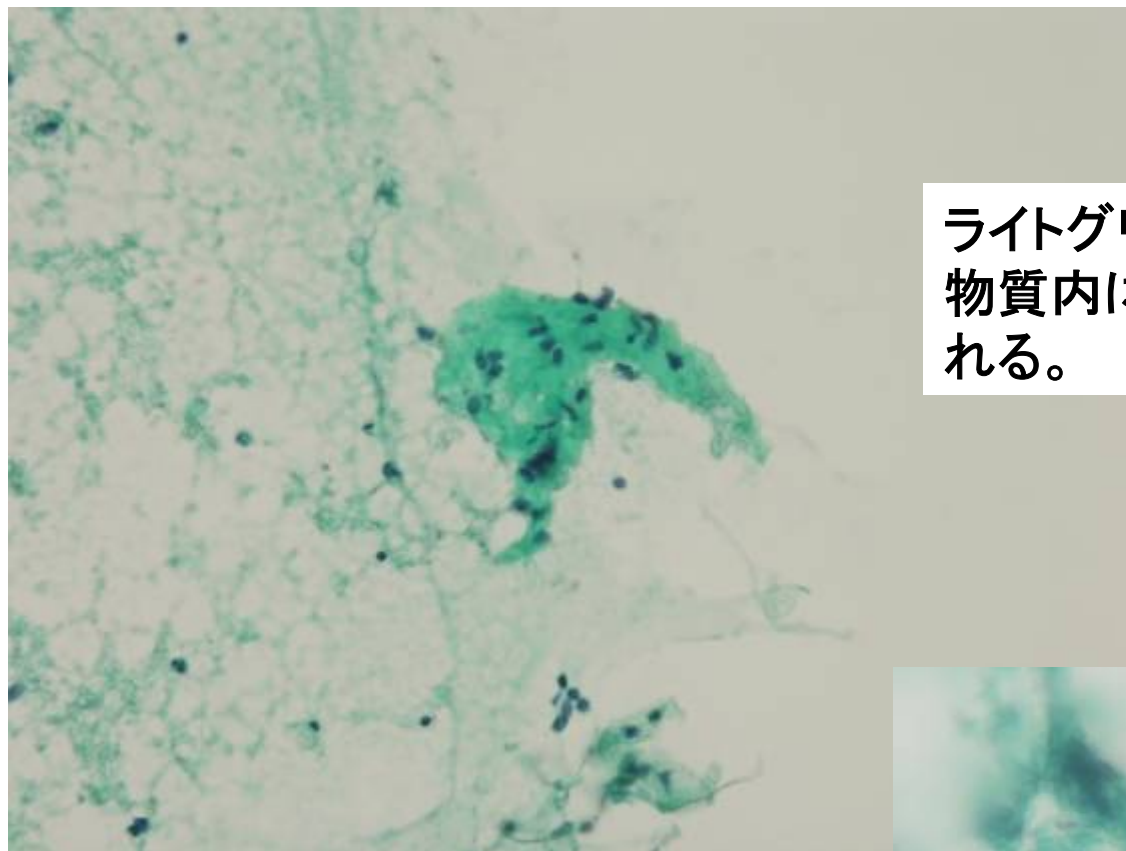
間質の細胞の核



ライトグリーン好性の基底膜様物質と物質内に紡錘形の細胞（間質の線維性組織）が見られる。

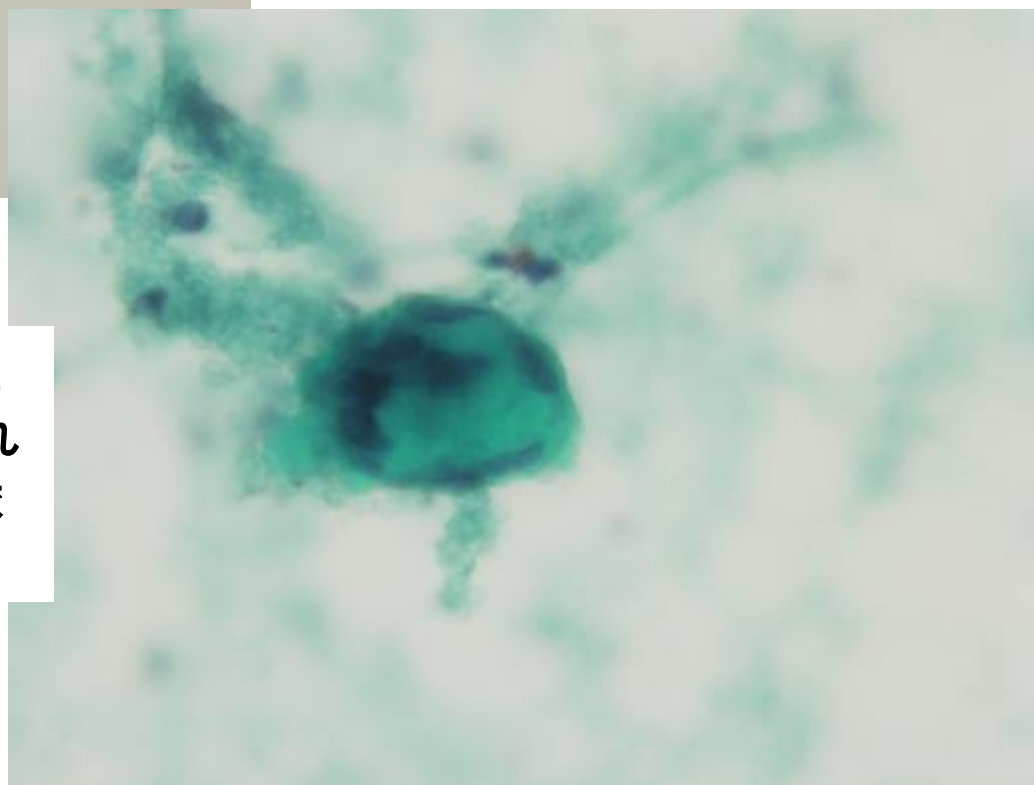
拡大

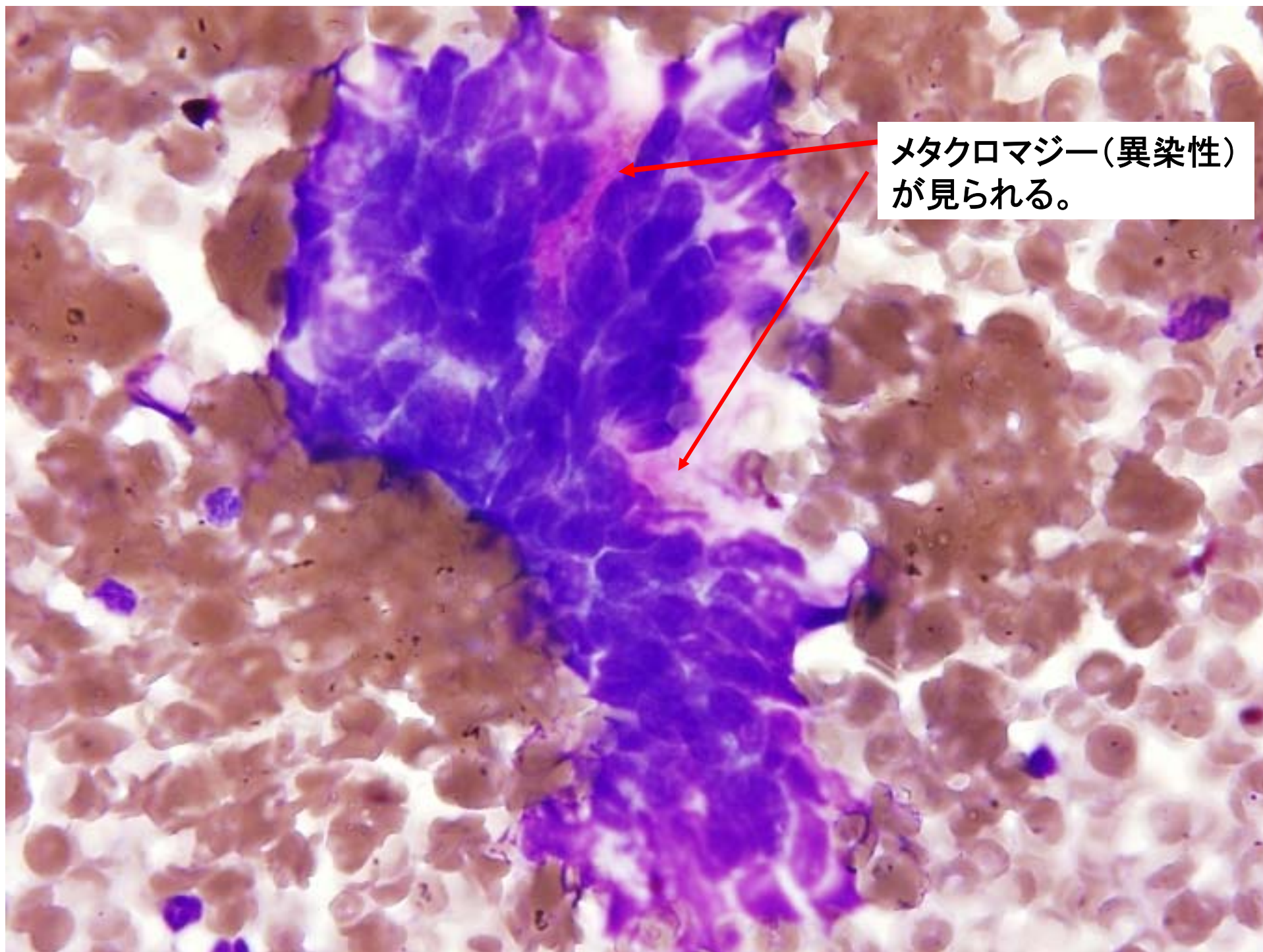




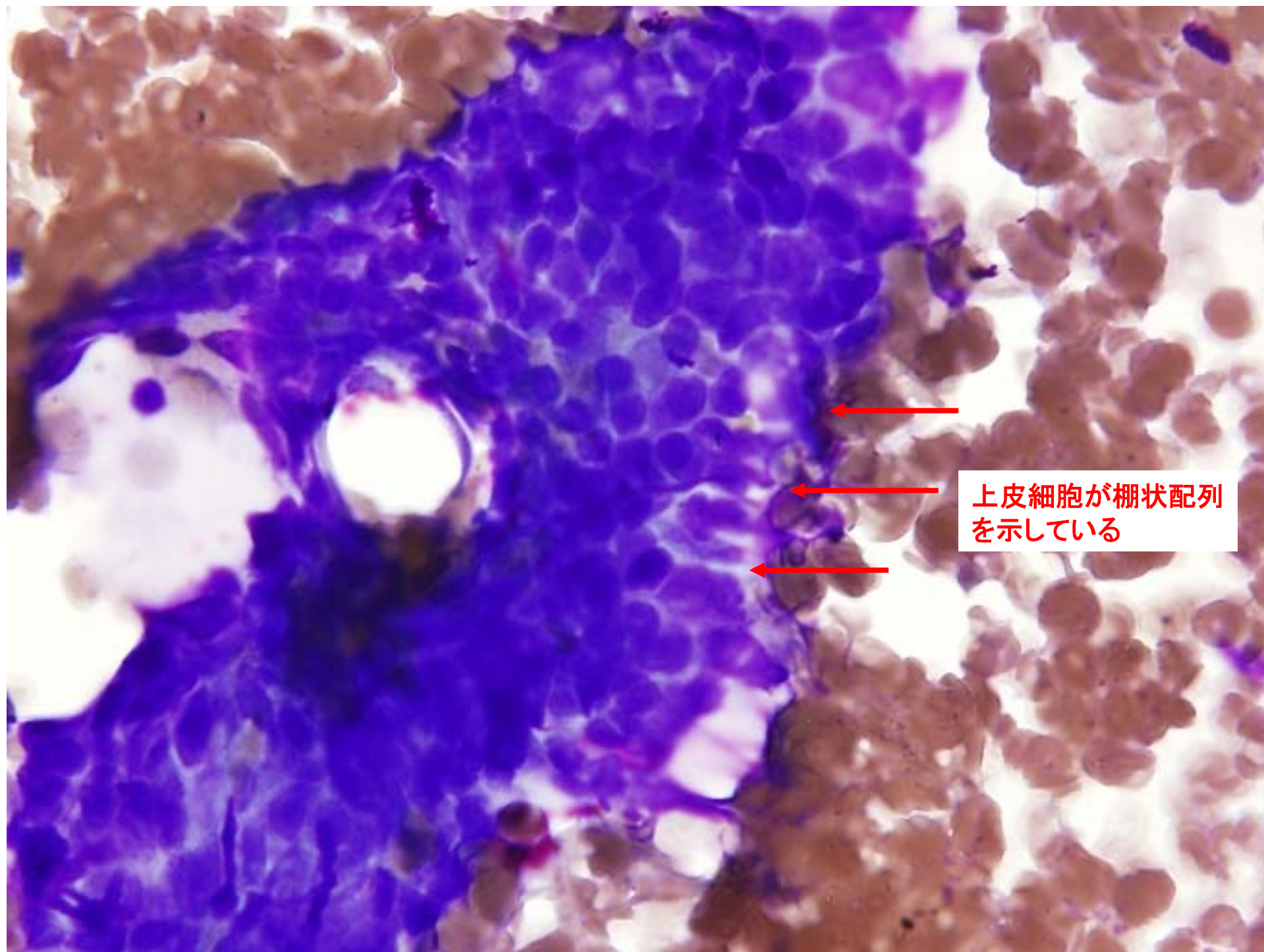
ライトグリーン好性の基底膜様物質内に紡錘形の細胞が見られる。

1列の基底細胞様細胞で囲まれたライトグリーン好性の小球が見られる。これは腺様嚢胞癌の硝子様球と区別が困難である。





メタクロマジー(異染色性)
が見られる。



上皮細胞が棚状配列
を示している

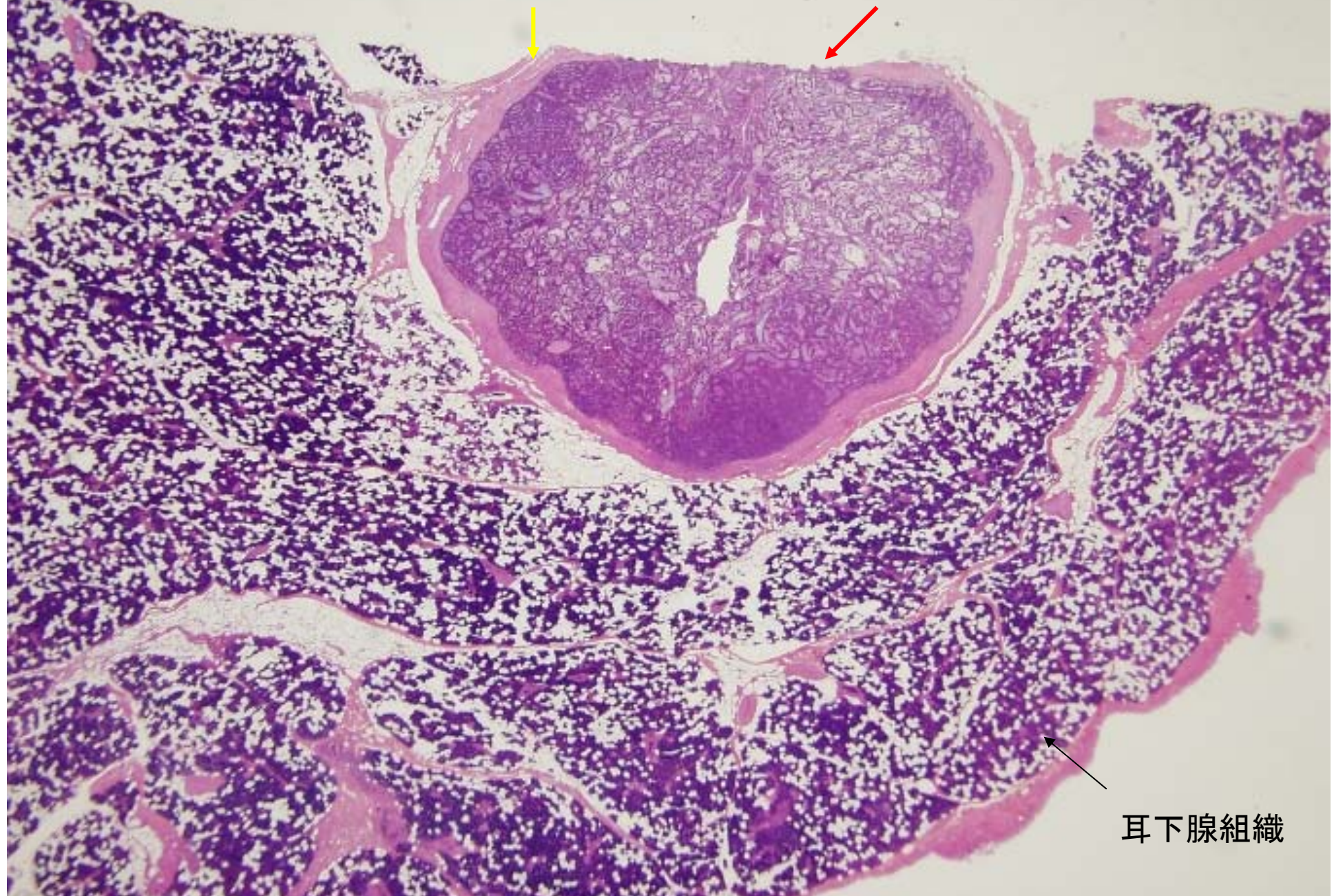
組織診

摘出物：左耳下腺（浅葉）47x25mm大、腫瘍部 10x8mm大

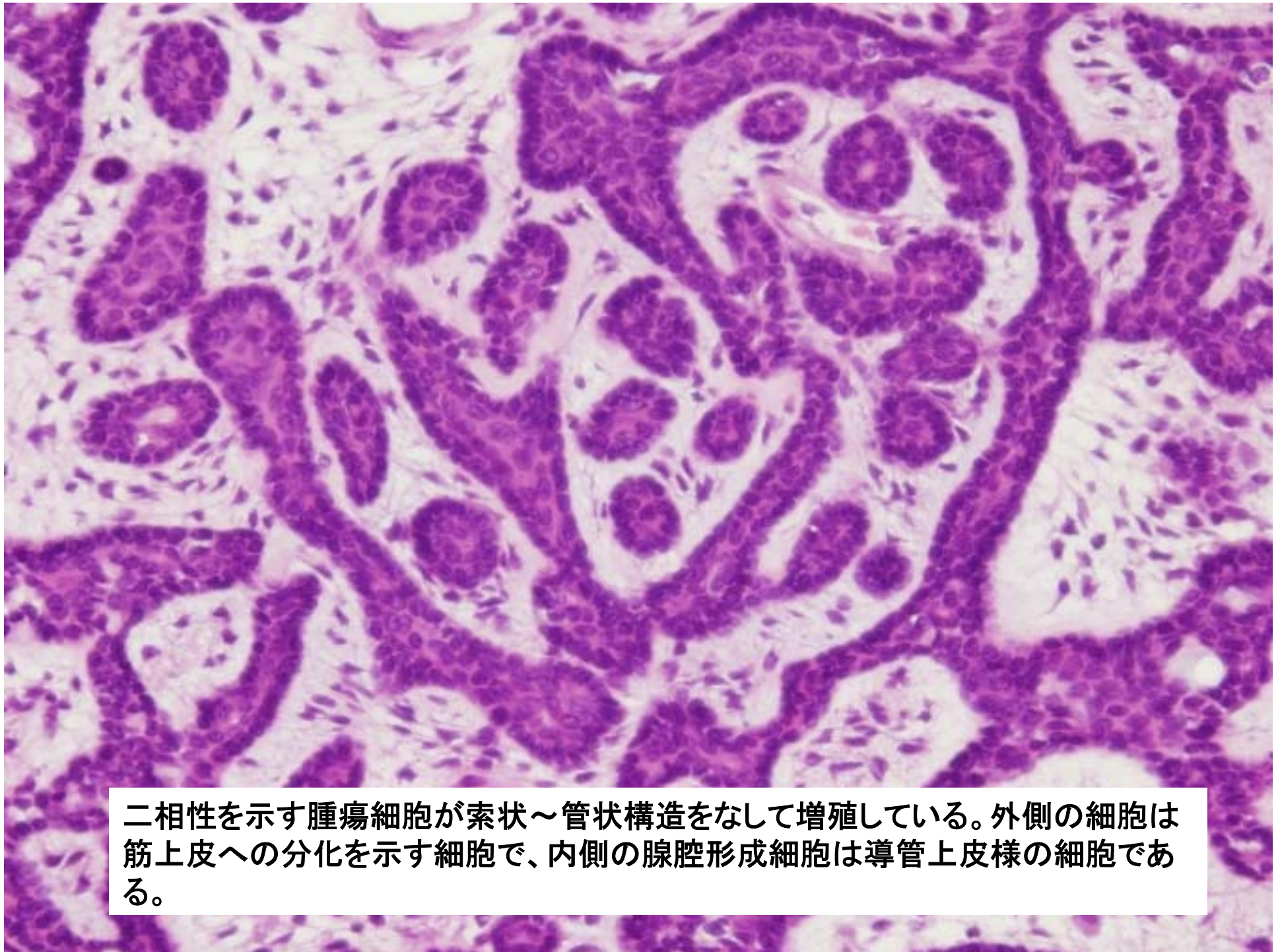
周囲白色との境界が明瞭で白色の腫瘍部がみられる。
出血部位は前回の生検部



耳下腺組織内に線維性被膜で周囲を囲まれた腫瘍塊が認められる。

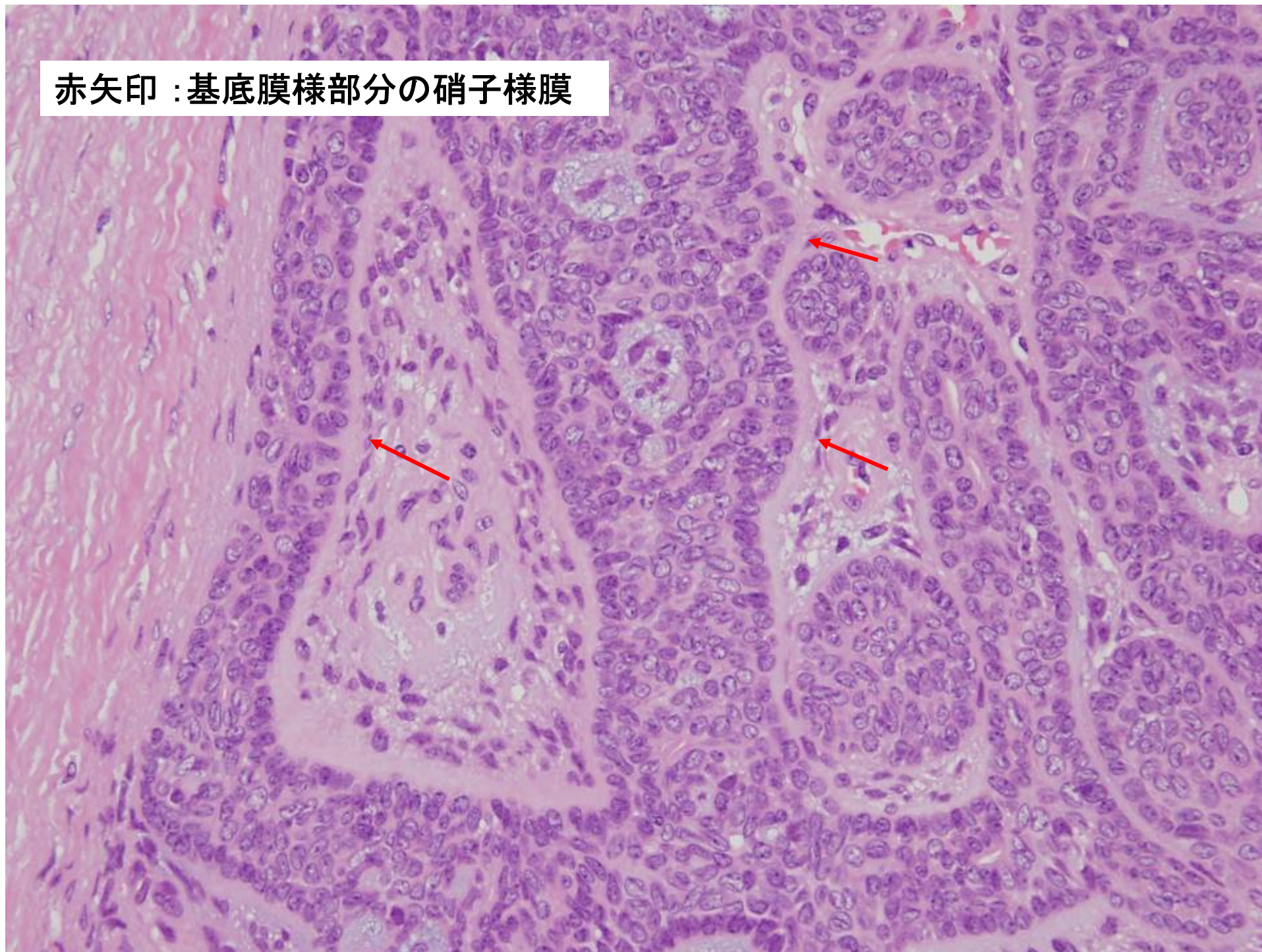


耳下腺組織



二相性を示す腫瘍細胞が索状～管状構造をなして増殖している。外側の細胞は筋上皮への分化を示す細胞で、内側の腺腔形成細胞は導管上皮様の細胞である。

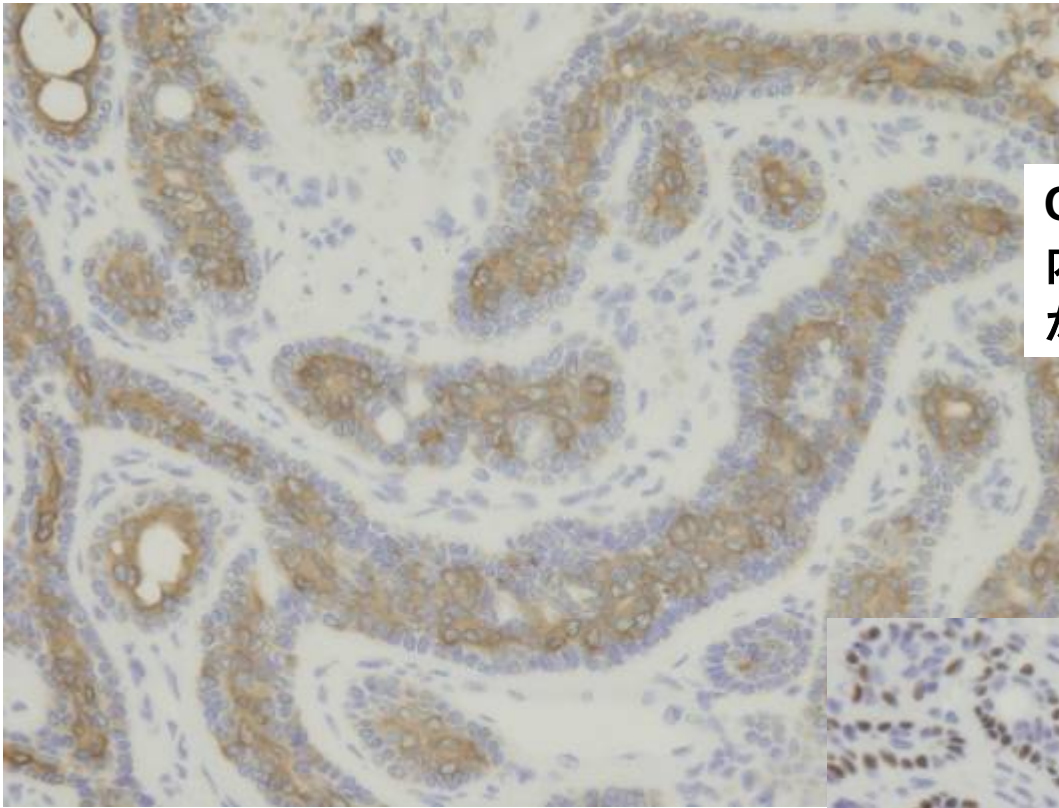
赤矢印 : 基底膜様部分の硝子様膜



免疫染色

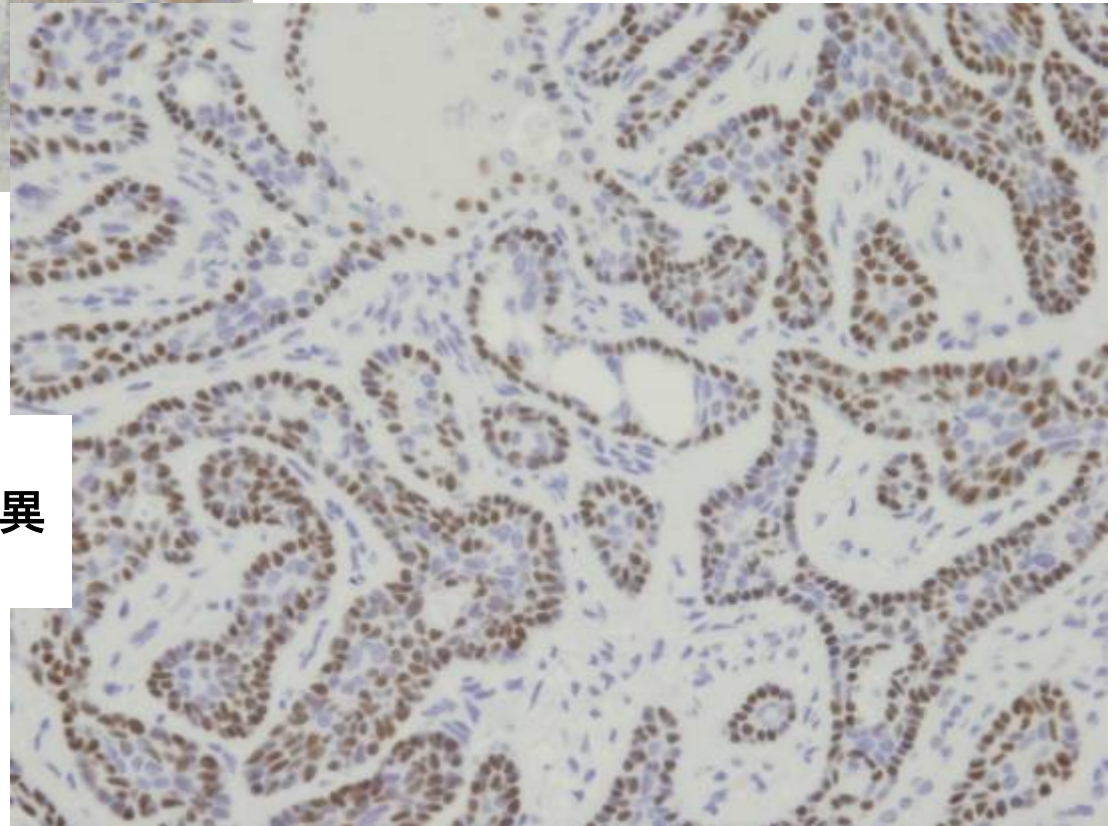
CK34 β E12:

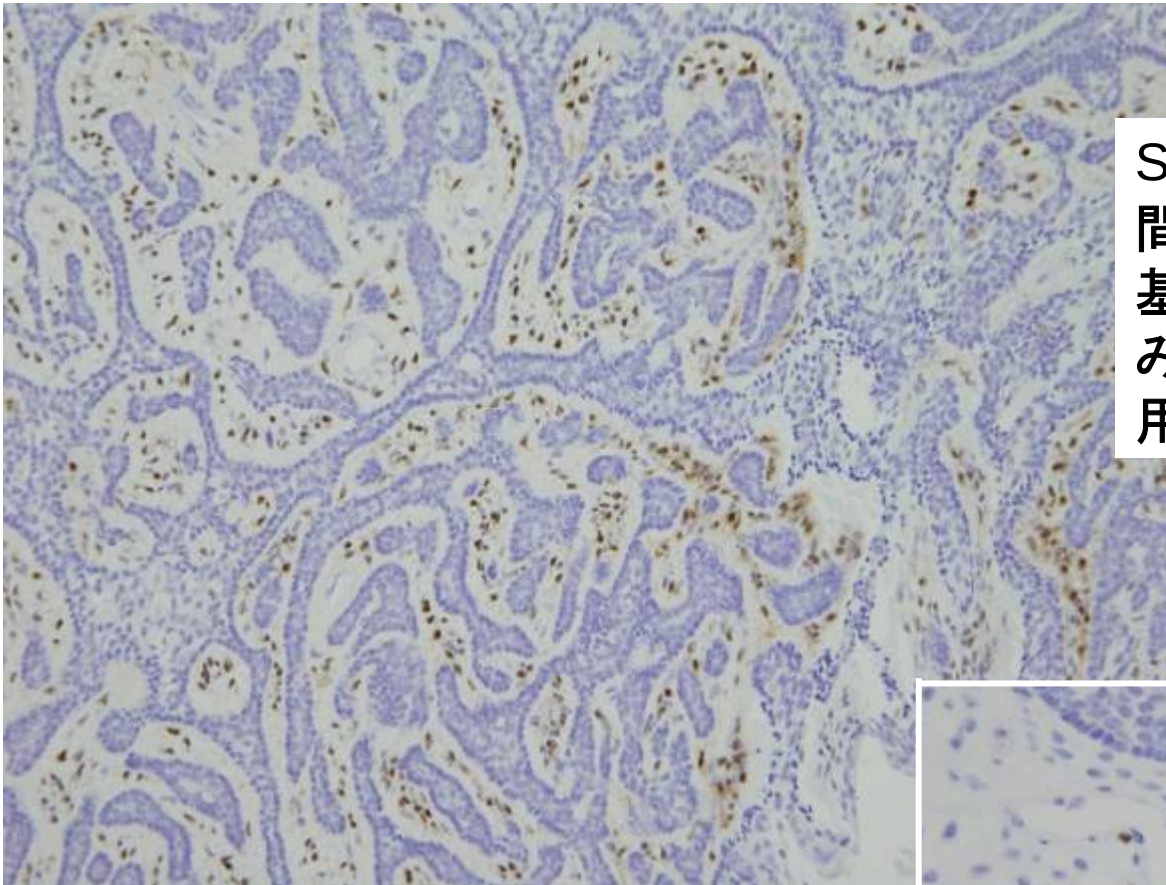
内側の管状構造を示す腺腔形成細胞が陽性を示す。



p63:

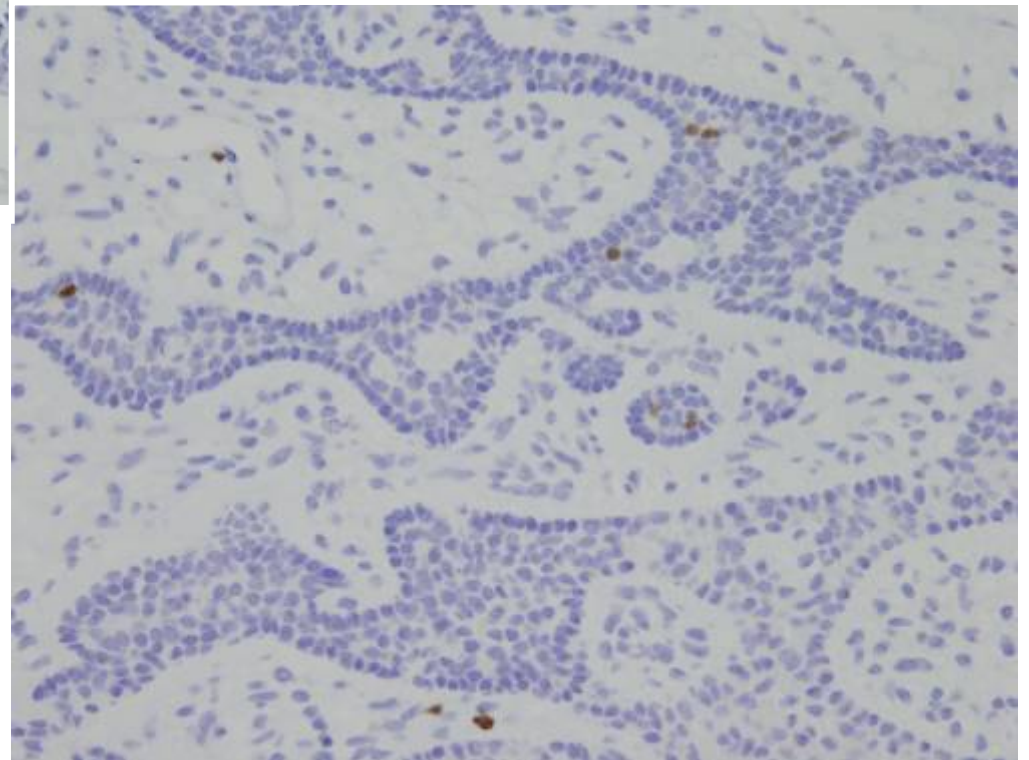
外側の非腺腔形成細胞が筋特異性に染まるp63陽性である。





S-100 :
間質細胞に陽性を示す。
基底細胞腺腫・腺癌だけに
みられる所見で、鑑別に有
用である。

Ki-67 :
陽性細胞はごくわずかである。



選択肢

1. 多形腺腫
2. 細管状腺腫
3. 基底細胞腺腫
4. 腺様嚢胞癌
5. 基底細胞腺癌

解答： 基底細胞腺腫

鑑別診断として、下記があげられる。

1. 多形腺腫
2. 細管状腺腫
3. 腺様嚢胞癌
4. 基底細胞腺癌

〔コメント〕

1. 多形腺腫:

多形腺腫の非定型的多形腺腫は粘液－軟骨様其質がみられず、組織像が基底細胞腺腫と類似している。硝子様其質内へ腫瘍細胞が解離する所見があれば多形腺腫を考える。免疫染色ではGFAP陽性細胞がみられ、S100蛋白陽性を示すのは非腺腔形成細胞である。基底細胞腺腫は腺腔形成細胞に陽性を示す。

2. 細管状腺腫:

発生部位が上口唇が多く、耳下腺には稀である。

基底細胞に類似した小型の細胞が偽乳頭状の細胞集塊としてみられる。

単層性の立方ないし円柱上皮から構成される小腺管が、血管結合組織性間質を伴って、吻合しあっている。基底細胞腺腫で見られるような腺上皮－基底細胞様細胞性の2相構造はみられない。

3. 腺様嚢胞癌:

腫瘍の核はhyperchromaticで、細胞形態はより角ばった形状を示す。細胞の集塊辺縁にほつれや毛羽立ちが目立つ。粘液球や硝子様球状構造がみられるが、基底細胞腺腫や多形腺腫でもみられ、鑑別が困難である。

腺様嚢胞癌の充実型では胞巣周囲に細胞が柵状配列を示すことがあり、鑑別に注意を要する。

4. 基底細胞腺癌:

基底細胞腺腫の悪性型であるが、細胞に異型や多形性に乏しく、細胞診のみでは鑑別が困難である。組織学的に周囲への浸潤性増殖の有無が鑑別に重要となる。

今回の症例は以下のことがポイントとなり、基底細胞腺腫の診断となる。

細胞診

細胞がシート状に増生し、周囲にライトグリーン好性の基底膜様物質が見られる。細胞は2相性で、細胞集塊の辺縁には柵状配列、内側には管腔様構造が認められる。ギムザ染色で細胞間や周囲にメタクロマジーがみられる。

組織診

腫瘍の周囲は線維性被膜で覆われ、周囲への浸潤が見られない。
二相性を示す腫瘍細胞が索状～管状構造をなして増殖している。外側の細胞はp63や α -SMA陽性の筋上皮への分化を示す細胞で、内側の腺腔形成細胞はCytokeratin陽性の導管上皮様の細胞である。
間質細胞はS-100タンパク陽性を示す。